

夏目漱石『彼岸過迄』論

——子どもの死を手掛かりにして

山 口 洋 子

1、はじめに

・『彼岸過迄』は、明治四十五（一九一二）年一月一日から四月二十九日まで、東京・大阪の両朝日新聞に連載された新聞小説である。大学を卒業したばかりの法学士田川敬太郎は、就職活動に奔走するうちに、友人の須永市蔵の周辺と関わりを持つことになる。須永は、従姉妹の千代子との恋愛感情と継母との親子関係が、複雑に絡んだ苦悩を抱えており、敬太郎はその真相を千代子、須永本人、須永の叔父松本から告白されることとなる。ところで、この小説が公にされる際の緒言「彼岸過迄に就いて」には、新聞小説の新しい試みとして、「個々の短篇が相合して一長篇を構成するやうに仕組」むこともしそれが失敗しても「離れるとも即くとも片の附かない短篇が續く文の事」であり、「夫でも差支へなからう」と記されている。また、この短篇を重ねていく手法は、死線をさまよった「修善寺の大意」後、一年半ほど本格的な執筆活動を控えていた、漱石の体調とも関わりがあると思われる。このように『彼岸過迄』は、「風呂の後」「停留所」「報告」「雨の降る日」「須永の話」「松本の話」という六つの短篇と、「結末」という纏めによって構成されているが、「雨の降る

日」を境に、前半は就職口を探すために請け負った、田川敬太郎の探偵体験を中心として、後半はその体験の中に散りばめられていた、個々の真相の告白を中心として描かれている。この構成は、『自然派』でも、『象徴派』でもなく、『自分は自分であるといふ信念』を持っていることを断言した、漱石独自の試みであり、『彼岸過迄』の新刊紹介の中でも、「従来世に出て居る小説類の行き方と趣を異にした、文壇に於ける新しい試み」として評価されている^{（注1）}。しかし、一方で、このような時間構造の在り方は、昭和三十六年に角川書店より出版された漱石全集の解説において、吉田精一氏が「アンバランスな小説」と指摘しているのを始めとして、前半の探偵物語の必要性、及び作品世界の導き手としての敬太郎の存在意味など、今日まで様々な角度から論じられている。特に、漱石の五女ひな子の死を題材にして描かれている「雨の降る日」は、それ故に作品世界の展開において、不自然なものとしてとらえられがちである。なぜ、漱石は構成上の破綻という危険を冒してまでも、作品の中心部に「雨の降る日」を描いたのであろうか。急死したひな子に対する養養としての想いは言うまでもないが、「雨の降る日」が前半部と後半部

夏目漱石『彼岸過迄』論 ——子どもの死を手掛かりにして

の境目に位置づけられていることにより、別の意図も見えてくる。例えば、子どもの死については、前半では敬太郎と同じ下宿に住み、後に大陸放浪者となった森本の子ども、後半では須永の妹を通しで触れられており、作品に底流する何らかの役割を果たしているとも考えられる。また、人間の死は、「修善寺の大患」を体験したばかりの漱石にとって切実な問題であろう。本稿では、漱石が「雨の降る日」を設定した意図を意識しつつ、特に後半部における子ども（須永の妹）の死に注目し、〈血縁〉によって他人を家族として繋ぐ子どもの存在が、須永とその継母の關係にどのような影響を及ぼしているのかを考察することにより、須永の苦悩の真相を探りたい。

2、時間構造

『彼岸過迄』は、敬太郎の探偵体験における謎が、千代子、松本、須永の個々の話により次第に明らかになっていくという時間構造を取っている。それは、たわいもない探偵物語に登場した平凡な人々の裏側に、様々なドラマが隠されていたことを敬太郎自身が確認していく物語とも考えられる。蛇の頭を彫った奇妙な洋杖を残すことにより、間接的に敬太郎の探偵行動に影響を及ぼしたのも、《非凡の経験に富んだ平凡人》と評される森本である。前半部において、森本は大陸放浪者となり、敬太郎の前から姿を消してしまうものの、その存在を見逃すことはできない。このように、一見、敬太郎の人生体験が中心かと思われる作品構成であるが、その活躍は「雨の降る日」を境に突然影を潜め、後半部では傍観者に徹している。また、

『彼岸過迄』の構成を時間に即して並び替えてみると、敬太郎は全ての出来事が起こってから顔を覗かせた人物でもある（一覽表参照）。《自分はたゞ人間の研究者否人間の異常なる機關が暗い闇夜に運轉する有様を、驚嘆の念を以て眺めてみたい》と敬太郎は言う。このような物語の聴き手としての敬太郎の立場を認めた場合、むしろ敬太郎に心の奥底を開示することになった、須永の心情の方が前面に押し出され、印象深い。もちろん、須永の現在ばかりではなく、須永が抱える過去の葛藤を見詰める敬太郎の役割も重要であるが、本稿では後半に浮かび上がってくる須永の苦悩に注目したい。

* 須永の年齢

幼少時

高校生

大学生

大学二年生

大学二年生

大学二年生

大学三年生

大学四年生

大学四年生

大学四年生

大学四年生

大学四年生

大学四年生

* 出来事

須永の母、千代子を須永の嫁に欲しいと田口夫婦に頼む。

須永の母、千代子のことを須永にほめかす。

須永の母、須永に千代子との結婚話を持ち掛ける。

須永、田口夫婦に千代子との縁談を遠まわしに断られる。

須永、田口家を訪問。風邪をひいて、一人で留守番中の千代子と親密な時間を過ごす。

須永、鎌倉の別荘で、高木に嫉妬し千代子と衝突する。

須永、鎌倉の別荘で、高木に嫉妬し千代子と衝突する。

須永、鎌倉の別荘で、高木に嫉妬し千代子と衝突する。

須永、鎌倉の別荘で、高木に嫉妬し千代子と衝突する。

須永、鎌倉の別荘で、高木に嫉妬し千代子と衝突する。

須永、鎌倉の別荘で、高木に嫉妬し千代子と衝突する。

須永、鎌倉の別荘で、高木に嫉妬し千代子と衝突する。

須永、鎌倉の別荘で、高木に嫉妬し千代子と衝突する。

須永、鎌倉の別荘で、高木に嫉妬し千代子と衝突する。

須永、鎌倉の別荘で、高木に嫉妬し千代子と衝突する。

須永、鎌倉の別荘で、高木に嫉妬し千代子と衝突する。

須永、鎌倉の別荘で、高木に嫉妬し千代子と衝突する。

須永、鎌倉の別荘で、高木に嫉妬し千代子と衝突する。

大学四年生（秋） 松本の末娘、宵子急死。 「雨の降る日」
大学四年生（四月） 松本、須永に出生の秘密を打ち明ける。

卒業試験後 須永、一人で関西に旅行に出掛ける。 「松本の話」
「松本の話」

大学卒業後（秋） 須永と敬太郎、大学を卒業する。「風呂の後」
「風呂の後」

大学卒業後（冬） 「停留所」
「停留所」

二月中旬、 敬太郎、千代子から松本が雨の日の訪問客に
応じない理由を聴く。 「雨の降る日」

敬太郎、須永から「須永の話」を聴く。 「須永の話」
「須永の話」

敬太郎、松本から「松本の話」を聴く。 「松本の話」
「松本の話」

また、このように時間構造を整理した上で、なお異質なものと
して浮上してくるのが、常に作品時間の中心部に位置している「雨の
降る日」という章である。「雨の降る日」は、なぜ松本が雨の降る
日に訪問客を断るようになったのかという理由を、千代子が語り手
となつて説明するという構成をとっている。このため、この章は「千
代子の話」であつてもよいのではないかとこの指摘もみられる。こ
の指摘は、『彼岸過迄』を須永と千代子の恋愛物語として読み解く
場合、特に重要な意味を帯びてくる。確かに、『彼岸過迄』には須
永と千代子の心の葛藤が多分に描かれている。その葛藤については、

『彼岸過迄』の中心が「須永の話」であり、「須永の話」は須永の
苦悩の物語であり、その苦悩の中で最も重要なものが千代子との恋
愛問題であるという小宮豊隆の考察を^{（注）}始めとして、多くの研究者の
間で論じ続けられているところである。例えば、田中愛氏は、『彼
岸過迄』は、「雨の降る日」を取り込むことにより、作品を一貫し
たものとしてとらえることができる視点、つまり構成上のバランス
を保つことが可能であると指摘し、その鍵として千代子の存在の重
要性を説いている。^{（注）}確かに、「雨の降る日」を「千代子の話」に置
き換えることは、「雨の降る日」の特殊性を払拭し、作品世界をスムー
ズに繋ぐ意味で有効な方法と思われる。しかし、漱石は「雨の降る
日」を「千代子の話」とはしていない。その意図は、かえつて「雨
の降る日」を一つの短篇として読み解くことにより、一層明らかに
見えてくる。「雨の降る日」と他の章との大きな違いをあげると、「須
永の話」や「松本の話」のように、語り手の内面の告白に終始して
いないこと、さらに漱石の実際の体験、五女ひな子の突然の死を題
材として描れていることがある。実子の突然の死に直面した漱石の
心境。そこには作品構成の破綻の可能性を孕んでいても、作品世界
に取り込まずにはいられなかった、漱石の意識が働いているのでは
ないだろうか。

3、ひな子の死

「雨の降る日」は、明治十一年十一月末に漱石の五女ひな子が、
突然亡くなったことをモチーフとして描かれている。その時の状況
は、漱石の日記、断片、書簡、及び鏡子夫人の手記『漱石の思ひ出』

などに認めることができるが、その体験は、『彼岸過迄』において、松本の末娘宵子の死として忠実に再現されている。人間の死は、「修善寺の大患」後の漱石にとって、切実な問題であつたに違いない。

また、身近な人間の突然の死は、自らも「死」の危険に晒されていた「修善寺の大患」時に、担当医だつた長与病院長、及び恋愛の噂もあつた大塚楠緒子など、思いがけず親しい人々との別れに遭遇した漱石にとって、痛切な体験であつたに違いない。「修善寺の大患」後に、その体験を赤裸々に描いた「思ひ出す事など」では、二人の死を知つた漱石の驚きや悲しみを窺うことができる。『彼岸過迄』の作品世界に身近な人間の死を描くことは、五女ひな子の供養というだけではなく、突然の運命に直面した漱石の心情の吐露とも捉えることができよう。ひな子の死に対する漱石の痛みは、日記に次のように記されている。

○生きて居るときはひな子がほかの子よりも大切だとも思はなかつた。死んで見るとあれが一番可愛い様に思ふ。さうして残つた子は入らない様に見える。

○表をあるいて小さい子供を見ると此子が健全に遊んでゐるのに吾子は何故生きてゐられないのかといふ不審が起る。

(略)

○昨日は葬式今〔日〕は骨上げ、明後日は納骨明日はもしするとなれば待夜である。多忙である。然し凡ての努力をした後で考へると凡ての努力が無益の努力である。死を生に變化させる努力でなければ凡てが無益である。こんな遺憾な事はない。

○自分の胃にはひびゝが入つた。自分の精神にもひびゝが入つ様な気がする。如何となれば回復しがたき哀愁が思ひ出す度に起るからである。

○また子供を作れば同じぢやないかと云ふ人がある。ひな子と同じ様な子が生れても遺憾は同じ事であらう。愛はパーソナルなものである。(…中略…) 其人自身に對する愛は之よりベターなものがあつても移す事の出来ないものである。

(明治四十四年十二月三日 「日記及び断片」)

突然のひな子の死に直面することにより漱石が辿りついたもの、それはひな子自身の大切さ、つまりひな子への「パーソナルな愛」であらう。この「パーソナルな愛」については、「雨の降る日」の中で次のように触れられている。

やがて家内同じ室で晝飯の膳に向つた。「斯うして見ると、まだ子供が澤山あるやうだが、是で一人もう缺けたんだね」と須永が云ひ出した。

「生きてる内は夫程にも思はないが、逝かれて見ると一番惜しい様だね。此所にある連中のうちで誰か代りになれば可いと思ふ位だ」と松本が云つた。

「非道いわね」と重子が喉子に耳語いた。

「叔母さん又奮發して、宵子さんと瓜二つの様な子を拵えて頂戴。可愛がつて上げるから」

「宵子と同じ子ぢや不可ないでせう、宵子でなくつちや。御

茶碗や帽子と違つて代りが出来たつて、亡くしたのを忘れる譯にや行かないんだから」

「己は雨の降る日に紹介状を持つて會ひに来る男が厭になつた」

（「雨の降る日」・八）

この描写は、作品世界を千代子の視点から読み解こうとする論者に、子どもの死を深刻に受けとめない千代子の軽薄さなどとして考察されている。目の前で息を引き取つた、宵子という存在に対する、千代子の愛情の薄さを指摘しているのである。しかし、漱石の実体験と重ねた場合、人間の死の不可思議さ、突然襲つてくる運命の恐ろしさ、延いては個の存在の大切さとしても、受けとめることができよう。また、この子どもの死、もしくは子どもの不在による夫婦間の危機は、漱石の他作品においても生々しい。例えば、『彼岸過迄』

以前の作品としては、『それから』をあげることができよう。平岡と三千代の不和の原因には、彼らの子どもの死が深く関わつておられる。また、『門』でも、徳義上の罪を犯した罰として、子どもができない宗助、御米夫婦の苦悩が繰り返して描かれている。このような子どもの不在により発生する夫婦間の危機は、『彼岸過迄』において、前半に登場する大陸放浪者森本の過去にも窺うことができる。突然襲つてきた不幸な運命に翻弄される人間の姿が、ここでも認められるのである。（一家の主人公であつた）森本は、『山神の祟には實際恐れを作してゐた』から『餓鬼が死んで呉れたんで、まあ助かつた』という。しかし、これは彼の本心とはいえない。だから

夏目漱石『彼岸過迄』論——子どもの死を手掛かりにして

からこそ、森本が大陸に去つた後、敬太郎は偶然電車で『私生児だか普通の子だか怪しい赤ん坊』を背負つた、『黒人だか素人だか分らない女』と出会い、森本が語つた妻に対する未練の言葉を思い出し、森本の運命を憂えるのである。この前半に見られる、森本の子どもが夫婦間に与えた影響は、後半に描かれている、須永の妹妙の死が、周囲（特に須永と継母の關係）に与えた影響に関わる伏線としても考へることが出来る。他人である夫婦を、その（血縁）により繋ぎとめる役割を果たしている子ども。その存在が突然の運命により奪われてしまつた時、周囲の人間關係はどうなつてしまふのか。人生の放浪者として生き続ける森本の姿は、今後須永が辿る道の可能性の一つとしても数えることができよう。その意味において、『彼岸過迄』に描かれた、子どもの死が投げかける問題は、単なる悲しみだけではない、より深い意図を内包しているのである。

4、須永の苦悩

須永市蔵は、軍人であつた父と継母の連れ子である妹の病没後、継母と二人きりで生活し、大学卒業後も、父の遺産に頼る高等遊民として生活している。友人の敬太郎から見た須永は、『至つて退嬰主義の男』であるが、就職口の紹介にも事欠かない親族に恵まれてもいる。その親族、田口の娘であり、須永の幼なじみの従姉妹として登場するのが千代子である。

御弓

——須永市蔵

須永の父

——妙

須永の継母(松本長姉)——田口の妻(松本次姉)——松本

——千代子——百代子——吾一

田口

須永と千代子はお互いに想うところはあるものの、《神經の鋭どく動く性質だから、物を誇大に考へ過したり、要らぬ僻みを起して見たりする弊がよくある》須永と《先の見えない程強い感情が一度に胸に湧き出る》千代子という性格の相違により、なかなか素直に接することができずにいる。また、二人は須永の継母によって、生まれてすぐに許嫁という関係で結ばれているが、それは単なる口約束であり、継母だけが強く信じ、望んでいる関係である。この許嫁という問題は須永と千代子の関係、及び須永と継母の関係、ひいては須永の内面の葛藤に深く絡んでくる。確かに「須永の話」以降、須永と千代子の恋愛問題が中心に描かれ、それによって須永の人間性が問われている。この二人の關係に不自然に関わってくるのが須永の継母である。この継母の行動により、それまで継母を実母と信じていた須永は、継母の真意に対して疑問を持ち始める。なぜ、母はこんなに熱心に千代子との結婚を望むのか。このような母親の言動の原因は様々な角度から論じられている。例えば、熊坂敦子氏は、

須永の実母である、小間使い御弓の血が入ってしまった、須永家の血統を正す為と考える。また、内田道雄氏は、須永家の血縁、及び家名を維持するための継母の執念としてとらえている。確かに、一家の妻として、そのような行動をとることは自然であろう。しかし、それならば須永の結婚相手が、必ずしも千代子である必要性はないのではないだろうか。一方、《世の中と接觸する度に内へとぐるを捲き込む性質》である須永は、継母の不審な言動の理由を追究し、ついに自分の出生の秘密に辿りつく。死を目前にした、父の「自分が死ぬと御母さんの厄介になる」という心配の言葉、父の葬式の際に継母が言った「御父さんが亡くなっても、今迄通り可愛がる」という不可解な言葉、ジフテリアによって他界した須永の妹妙が、須永を一度も「兄」と呼ばなかつたことなどの、不自然な言動は絶えず須永を苦しめる。しかし、須永の継母に対する想いは、実母と信じていた母親が、実は継母であることを、叔父の松本から打ち明けられてもかわることはない。須永にとつての継母は、常に《慈母》なのである。ところが、須永の継母にとつて、《血縁》という問題は、自分が須永家との繋がりを維持する上で、非常に重要な意味を持つ。継母にとつて、須永の父との間に誕生した妙の死は、《血縁》における須永家との断絶を意味する。確かに、須永と継母の間に《血》の繋がりは存在しない。しかし、千代子が須永に嫁したならば、千代子の叔母であるという立場を利用し、須永家との《血縁》が成立する(系図参照)。つまり、継母が望む千代子との縁談は、複雑ではあるが、自分を須永家と繋ぐ唯一の方法だったのである。それは、須永に千代子との縁談を勧めながら、「須永のためではなく、自分

のため」にと涙して訴える、継母の様子などに強く現れているといえよう。また、その言動を不可解なものとしてとらえていた須永も、自分の出生の秘密を聞きだした時の、松本の言葉により、その気持ちを察するのである。

「御母さんが是非千代ちゃんを貰へといふのも、矢つ張血統上の考へから、身縁のものを僕の嫁にしたいといふ意味なんでせうね」

「全く其所だ。外に何にもないんだ」

〔松本の話〕・六

つまり、継母は純粹に須永や須永家のことを考え、千代子との縁談を望んだのではない。確実に、須永家と強い血縁を持つためでもあったのである。しかし、須永が求めたものは、その純粹な気持ち、つまり自分という存在に対する、継母の「パーソナルな愛」であった。この相反する二人の感情こそが、須永と継母の関係における不幸なのである。では、千代子との関係はどうか。須永は「千代子との結婚の何が不都合なのか」を自問しているが、「理由も何もまだ考へない先に」《恐ろしくなつた》という。《見識の狭い》千代子は、《肉眼で指す事の出来る権力か財力》を男性（夫）に望んでおり、それは須永に対しても例外ではない。これが《二人の間に横たはる根本的不幸》であり、須永が千代子との結婚に踏み切れない重要な要因の一つである。千代子もまた、あるがままの須永の存在を受け止めることができないのである。

夏目漱石『彼岸過迄』論 —— 子どもの死を手掛かりにして

5、おわりに

自分の出生の秘密を知った須永は、深い孤独に陥る。

〔…略…〕僕は貴方の御話を聞く迄は非常に怖かつたです。

胸の肉が縮まる程怖かつたです。けれども御話を聞いて凡てが明白になつたら、却つて安心して氣が樂になりました。もう怖い事も不安な事ありません。其代り何だか急に心細くなりました。淋しいです。世の中にたつた一人立つてゐる様な氣がします」

「だつて御母さんは元の通りの御母さんなんだよ。おれだつて今迄のおれだよ。誰も御前に對して變るものはありやしないんだよ。神經を起しちや不可ない」

「神經は起さなくつても淋しいんだから仕方がありません。僕は是から宅へ歸つて母の顔を見ると屹度泣くに極つてゐます。今から其時の涙を豫想しても淋しくつて堪りません」

〔松本の話〕・六

また、須永は松本に実母の消息を尋ねるのだが、実母御弓は既に他界しており、墓の在処も継母だけが知つているため、その関係は絶えてしまう。無条件に自分を受け入れてくれる存在をなくした須永は、一層深い孤独を感じる。また、その後継母とも普段通りの対応ができず、顔を合わせることもさへ苦痛だという、複雑な感情に襲われてしまう。松本に物事を深く考え過ぎず、《浮氣》になること

により自己を解放するように勧められた須永は、一人旅という非日常の世界に入ることにより、それに成功する。しかし、『世の中と接觸する度内へとぐるを捲き込む性質』を持ち、それが『命根に横はる一大不幸』である須永にとつて、旅による自己回復はあくまで一時的なものであり、これからの日常における平安は保証できない。確かに、『彼岸過迄』には、須永と千代子の恋愛物語が切々と描かれている。しかし、その背後には、「雨の降る日」に流れているもう一つの主題、つまり、漱石が五女ひな子の死により実感した『パースナルな愛』の物語が存在する。あらゆる状況の中で、自分の存在意味を確認しようとし、苦悩する須永。彼にとつて、他者から一人のかけがえのない存在として認められる（愛される）ことは、自身の生のかげがえのなさを実感し、その苦悩から解放される唯一の救いではなかったか。その意味において、『パースナルな愛』は、『彼岸過迄』を読み解く大切な要素と思われる。しかし、この自己の本質を見極めようとする問題は、まとめである「結末」の章の《突如として已んだ様に見える此劇が、是から先何う永久に流轉して行くのだらうか》という一文にも反映されているように、全く解決への道が示されていない。その課題は、今後『行人』の一郎、『ころ』の先生、『道草』の健三へと持ち越され、より深く追求されていくのである。

(注1) 『彼岸過迄』を読む (筆者不明 大阪朝日新聞 大正元年十月十三日)。

(注2) 『彼岸過迄』(『漱石全集』第六卷 岩波書店 昭和十一年

八月)。

(注3) 『彼岸過迄』論—「雨の降る日」の悲劇と千代子との関わりを中心に—(熊坂敦子編『迷羊のゆくえ—漱石と近代』翰林書房 平成八年六月)。

(注4) 『彼岸過迄』—我執のゆくえ—(『夏目漱石の研究』 楓桜社 昭和四十八年三月)。

(注5) 『彼岸過迄』再考(『古典と現代』第五十五号 昭和六十二年九月)。

*本文、及び日記の引用は、新書版『漱石全集』による。